

京都大学	博士(文学)	氏名	吉田典子
論文題目	ゴラとマネ、印象派 —— 1860年代後半から1880年代前半における文学と絵画		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究の中心的な主題は、フランス19世紀後半の作家エミール・ゴラの小説および美術批評と、エドゥアール・マネや印象派を中心とする同時代の絵画との相関関係を考察することによって、彼らがどのような関心を共有し、どのような芸術を目指したかを、近代都市パリの歴史的・社会的・文化的な文脈の中で探求することである。</p> <p>従来の研究では、ゴラは美術批評は、1860年代後半にスキャンダルの渦中にあったマネを敢然と擁護し、アカデミズムを批判して「新しい絵画」の動向を強く支持したことに価値が認められている。彼らはカフェ・ゲルボワなどに集まり、1869年代末には文学と絵画における一種の共闘関係を打ち立てた。しかし、1870年代以降については、ゴラが79年にマネと印象派への「苦言」を呈したこと、また、86年には画家を主人公とした小説『制作』によって長年の親友セザンヌと決裂したとされることなどにより、ゴラと画家たちの関係にはしだいに齟齬が生じるようになったと考えられている。また、そもそもゴラが彼らの絵画の真価を理解していたのかどうかという疑問の声も根強く残っている。</p> <p>一方、ゴラの小説と同時代の絵画の関係についての先行研究は、86年の小説『制作』を中心とする伝記的研究や源泉研究、あるいは小説と絵画に共通するモチーフや描写の技法、人物の視点や空間の表象等の研究が主となっている。確かに、ゴラと画家たちは同じような現代生活のモチーフを探求し、似通った技法で描き出した。ゴラの描写文における視覚的特徴、とりわけ時刻や天候によって変化する光の戯れや、色の斑点として知覚される鮮やかな色彩などが、印象派の絵画技法と共通していることは明らかである。しかし、ゴラの小説と同時代の絵画との関係は、モチーフや技法の類似性にとどまるものだろうか。</p> <p>こうした問題関心の下に、本研究においては3つの大きな目的を設定した。第1は、ゴラは美術批評にかんして、すでによく知られている1860年代後半の評論だけではなく、1870年代以降の評論を詳しく検討することである。そして、特に、ゴラは美術批評家としての能力を疑問視させる原因となっている79年のマネに対する「留保」やマネや印象派への「苦言」について、その意味を再考し、美術批評家としてのゴラの意義を再検討することである。第2の目的は、ゴラの小説と同時代の絵画の関係について、類似したモチーフや技法の下に存在する社会的、政治的、あるいは文化的な文脈を探求することによって、ゴラと画家たちの共闘関係が単に芸術表現上の問題であるだけでなく、芸術と社会についてのより広範な問題意識に関わりを持っていることを明</p>			

らかにすることである。そして第3に、以上の美術批評と小説や絵画作品の検討に基づき、これまであまり問題にされなかった1870年代以降におけるゾラとマネの関係について総合的に検討し、60年代後半の共闘関係がどのように変遷していくのかを見ていくことである。本研究では、以上の3つの目的を、全3部12章にわたって検討した。

第1部「ゾラのアート批評——ゾラはマネ、印象派を理解しきれなかったのか？」においては、70年代以降のゾラのアート批評を中心に検討した。

第1章「『自然主義』と『印象主義』——ゾラとマラルメのアート批評」においては、一般にマネと文学者の関係を語る際に、74年以降についてはマラルメとの関係が重視されることに着目し、ゾラのアート批評の特徴を、マラルメの批評との関連において検討した。1876年のマラルメによる「印象派の画家たちとエドゥアール・マネ」は、マネを印象派の主導者として位置づけ、「印象主義」の美学の特質をとらえようとするものであった。筆触や色彩の重要性を指摘するマラルメの評論はきわめて重要なものであるが、結果としてマネと印象主義を強く結びつけ、そこにフォーマリズム的なモダニズムの系譜を見いだすことに貢献したことも確かである。近年の美術史研究では、モダニズム再考の気運とともに、マネと印象派を切り離し、また彼らの芸術を、もっと多様なアプローチによって考察しようとする流れがあり、その中でゾラのアート批評は再評価できる可能性があることを指摘した。

第2章「ゾラのアート批評と印象派」においては、70年代のゾラのアート批評の特徴は、芸術表現そのものの美学的問題を扱うよりも、社会的事象としての芸術の問題に重点を置くものであり、とりわけ制度論的な観点から公式サロンと印象派展を分析しようとするものであることを指摘した。ゾラが79年と80年に印象派、特にモネに対して投げかけた安易で拙速な仕事に対する苦言は、従来指摘されるようにゾラが印象派のスケッチ性や視覚混合の技法を理解しなかったのではなく、当時の印象派が置かれていた社会的状況を踏まえた上で、十分に構想を練った「傑作」を世に問うことで万人を納得させるべきだという助言であった。ただし、ゾラのアート批評からは、印象派の画家たちが「装飾絵画」への志向を示して、人間や社会の現実を見据えることから遠ざかっていく傾向を見せていることに不満を覚えていることも読み取れる。

第3章「ゾラのアート批評とマネ」においては、まず、70年代にもゾラはマネを擁護し続けていることを確認した上で、79年のマネに対する「留保」の理由を考えると、印象派の場合と同様、マネがその頃もまだ「公衆の無理解」に苦しんでいたという事実が挙げられる。ゾラは、マネにもう少し公衆の敵意を和らげることのできる「手＝技術」があれば、と考えたのであろう。しかし、印象派の場合とは異なって、ゾラは翌80年にはマネに対して「倦むことのない自然主義の職人」として最大級の敬意を払っている。またマネの死後、1884年に開催された遺作展のカタログにゾラが寄せた序文は、これまであまり顧みられなかったテキストであるが、ここでゾラは79年のマネへの一種の「失言」を修復し、あらかじめ定まった手法を持たないことにこそマネの「天

才」があることを認めており、ドラクロワ、クールベに次ぐ存在としてその歴史的価値を高く評価していることを示した。

第2部「ゾラの小説と同時代の美術」では、これまで主な研究対象とされた86年の芸術家小説『制作』ではなく、70年代から83年までに執筆された5つの小説を取り上げ、小説と絵画との具体的な関係を考察した。この第2部は、3つに区分することができる。まず、第4、5、6章では、パリ中央市場を舞台に商人たちの世界を描いた『パリの胃袋』を取り上げて、芸術における物質主義や商品性の問題、及び芸術と共和主義の問題を考察した。絵画との関係におけるこの小説の重要性は、1873年という第1回印象派展の前年に出版されていること、また、マネが1879年にセーヌ県知事に提出するパリ市役所壁画プランで「パリの胃袋」をコンセプトにしていることから推察できる。

第4章「芸術における物質主義と商品性——『パリの胃袋』(1873)とマネ」においては、パリ中央市場の食料品の描写と静物画の問題を取り上げた。静物画は、物語絵画の持つ「観念(イデ)」に邪魔されることなく、絵画の造形的・物質的な側面を十全に追求することのできるジャンルであり、『パリの胃袋』における食料品の描写には、マネの静物画との深い関連が認められること、そこには商品性が刻印されていることを指摘した。

第5章「芸術と共和主義(1)——『パリの胃袋』(1873)と印象派の都市風景画」では、『パリの胃袋』において、政治と芸術の関係がどのように表象されているかを考察した。そして、第3共和政初期においてゾラと画家たちが共有した関心は、帝政期のオスマンの都市改造によって無味乾燥な規格化を蒙り、普仏戦争とコミューンによって大きな破損を受けた都市パリを、共和国の首都としていかに再生し、色彩豊かに「装飾」するかという問題であったことを示した。

第6章「芸術と共和主義(2)——マネとモネによる1878年の都市風景画とゾラの小説」においては、1878年6月30日、第3共和政下において初めて制定された国民の祝日に、三色旗で飾り立てられたパリの町を描いたマネとモネの作品に関して、『パリの胃袋』との関連性を指摘した。また、この祝日の政治的意味を探求した先行研究を踏まえて、特にマネの絵に描かれる「松葉杖の男」の表象に注目し、ドーミエの版画や『居酒屋』や『ナナ』との関連を指摘し、共和主義がいかに作品に表出されているかについて考察した。

続く第7、8、9章で取り上げたのは、主としてジェンダーやセクシュアリティの問題である。第7章「都市ブルジョワの生活情景——『愛の一ページ』(1878)と印象派絵画」では、パッシー地区に住む裕福で保守的なブルジョワの未亡人と娘を主人公としたこの小説が、モネやルノワール、ティソなどの絵画と関連を持つことを示した。そしてゾラが印象派の穏やかで日常的な情景に、激しい内面のドラマを与えていることを指摘し、また「瞬間」を視覚的に捉えようとする印象派絵画と、描写にも物語性

や象徴性を付与しようとするゾラとの相違を指摘した。

第8章「近代都市とジェンダー——『愛の一ページ』(1878)とベルト・モリゾ」においては、ゾラの小説と印象派の女性画家の世界との関連を考察し、ゾラの小説は、上流ブルジョワ階級に属するモリゾ自身と彼女の絵画世界から大きな示唆を受けていることを指摘した。またモダニズムとジェンダーの観点から、女性画家モリゾの世界と男性作家ゾラの根本的な違いについても考察した。

第9章「絵画とセクシュアリティ——『居酒屋』(1877)『ナナ』(1880)とマネ」では、ゾラの登場人物ナナと、マネの絵画《ナナ》(1877)の関係について考察した。マネの絵は明らかに、小説『居酒屋』第11章に示唆を受けており、ゾラのテキストとマネの図像を比較して、マネは、ゾラの叙述の中にある諸要素を一幅の画面の中に巧みに統合しており、それはゾラのテキストの細部の、性的なほのめかしを持った言葉遊びにまで及んでいることを指摘した。

第10章「近代商業と女性——『ボヌール・デ・ダム百貨店』(1883)とショーウインドウの中の女たち」では、近代商業の表象としての「ショーウインドウ」と同時代の絵画の関連の問題をジェンダー論的観点から検討した。ゾラは芸術と商業の関わりに敏感であった作家であり、2つの商業小説『パリの胃袋』と『ボヌール・デ・ダム百貨店』は、いずれも「ショーウインドウ」が重要なモチーフとなっている。本章では、画家クロード・ランティエとデパート王ムーレが美学的な共通項を持っており、いずれも鉄とガラスの建築を賛美するモダニストであると同時に、大胆な色斑を好む「色彩家」でもあることを指摘した。また、女性の魅力を言祝ぐ「祭壇」としてのショーウインドウには、女性の身体の断片化と鏡による増殖のイメージが顕著であることを示し、マネの《フォリ・ベルジュールの酒場》をはじめ、商店や売り子を扱ったティソ、ドガの絵画についても分析した。

第3部「ゾラとマネ：共和主義者の共闘」においては、1860年代後半に成立したゾラとマネの共闘関係が、70年代以降どのように継続していったのかについて考察した。

第11章「マネと『自然主義』——1870年代のゾラとマネ」では、70年代以降もゾラとマネは継続的な親交を続けていたことを、マネからゾラへの書簡を中心に示した。彼らはゾラの親しい友人でもあった「自然主義の出版者」シャルパンティエ家のサロンでも顔を合わせていた。また、70年代におけるゾラの小説とマネの絵画の関連を年代順に検討して、彼らが同時期に似通った関心の所在を示していることを明らかにした。

第12章「『共和国』の芸術」においては、1879年以降、マネが亡くなる1883年までの期間について、マネの仕事を中心に、ゾラとの関係を考察した。1879年の共和派政権の誕生は、若い頃から熱烈な共和主義者であったマネにとって特別な出来事であり、彼は新しいパリ市庁舎の装飾に携わることで、共和国政府の公的な画家になることを望んだ。マネがこの装飾プランのコンセプトを「パリの胃袋」という表現で表したこ

とは非常に重要である。一般には、マネへの「留保」によってゾラとの関係に齟齬が生じたとされる1879年に、マネはむしろゾラとその「自然主義」の陣営に接近していることを指摘した。またこの時期に、マネがクレマンソーやロシュフォールといった共和派の政治家の肖像を描くなど、「共和国の歴史画家」としての姿を明確にしていることを示した。

以下、全体を総括する。

「ゾラはマネや印象派を結局は理解できなかった」とする従来の一般的な言説には、ドレフュス事件で多くの反ドレフュス派を敵に回したゾラが、これまで長い間にわたって、知識人層やアカデミズムから冷遇されてきた歴史的経緯によるところが大きいと思われる。ゾラ文学は20世紀後半になってようやくまともな研究対象として扱われるようになり、近年では19世紀の都市論や社会史の重要な証人として、また神話学や精神分析学、ジェンダー論や心性の歴史学などの豊かな水脈として、その評価が高まっている。本論文においては、まず、ゾラの美術批評に関してそのような再検討を試みた。つまり、ゾラのテキストを同時代の文脈に置きながら正確に読み直し、従来のやや安易な「ゾラ批判」を修正することを試みたのである。そして、ゾラのアート批評の価値は、マネや印象派の美学的なモダニズムを直観的に把握しただけでなく、近代における芸術と社会、とりわけ公衆との問題を重視したことにあることを指摘した。ゾラが、79年にマネや印象派に苦言を呈したのは、従来指摘されるように彼らの絵画の革新性を理解しなかったのではなく、公衆との関係の改善を図るための助言であったと考えられる。ただし、ゾラは、印象派が「装飾絵画」やいわゆる「純粹絵画」へと向かおうとする傾向には賛同しなかった。ゾラにとって芸術創造は、社会や人間の現実と切り離せないものだったからである。

その点、マネはゾラにとって、最後までもっとも信頼し評価する画家であったと考えられる。本論文では、ゾラとマネの「共闘」関係は、従来60年代後半がピークであると考えられているのに対して、70年代から80年代初めにかけても、両者のあいだには親しい交友関係があり、とりわけ共和主義者として共通の社会的な関心が存在していることを明らかにした。そして、彼らの芸術活動において、1879年の第3共和政下のフランスにおける初めての完全な共和派政権の誕生が、重要な意味を持っていることを指摘した。ゾラはこの年から、大々的な「自然主義キャンペーン」を開始する。一方、この年にマネがパリ・コミューンで消失したパリ市役所の新しい建物のための壁画装飾プランを提出したことは、マネ研究においては従来さほど問題にされていないが、このことは「共和国の歴史画家」であろうとしたマネの意志を示すものとして特筆されるべきであろう。

ゾラとマネがたがいに大きく影響し合っていたことは、ゾラのアート批評だけではなく、彼の小説作品とマネの絵画の関係を詳細に検討することによって、よりいっそう明らかになる。本論文では、両者の関わりは、単にモチーフや技法の共通性に留まる

のではなく、芸術と商業、政治、都市、階級、ジェンダー、セクシュアリティなどに関わる広範な文脈に結びついており、そこに彼らの芸術の「現代性＝近代性（モデルニテ）」が見いだせることを示した。

ゾラとマネは、1860年代後半から80年代のはじめにかけて、ちょうどフランスにおいて共和派体制が確立されていき、資本主義経済が急速な発展を見る時期に、そうした社会の変化に正面から対峙し、互いに深く影響を与え合いながら、文学と絵画それぞれの領域においてその創作活動を展開したのである。それが本論の結論である。

(論文審査の結果の要旨)

吉田典子氏の「ゾラとマネ、印象派—1860年代後半から1880年代前半における文学と絵画」は、副題が示しているように、ゾラが自然主義作家としての方法を確立した『テレーズ・ラカン』(67)から、美術界をあつかった『制作』(86)に至るまでの『ルーゴン=マッカール叢書』を中心とする主要作と、同時期のマネや印象派をめぐる美術批評とを対象とし、先行研究を克明に検証したうえで、文学と美術の対話に斬新かつ説得的な数々の創見を提示した優れた論考である。

作家の美術批評をめぐる従来の定説では、66年の先駆的評論でマネの「草上の昼食」と「オランピア」を称揚しておきながら、79年にマネと印象派へ「苦言」を呈し、86年には主人公の画家を否定的に描いた『制作』によって親友セザンヌと決別したことなどを根拠として、ゾラはマネや印象派に自分の小説理念と同じ「自然主義者」を見ていただけで、印象派固有の美学を理解していなかったとされる。本論の第1部「ゾラの美術批評—ゾラはマネ、印象派を理解しきれなかったのか?」は、ゾラの論考と先行研究とを綿密に再検討したうえで、マネの経済的窮状、印象派内部の分裂、当時のユイスマンスへの手紙、マネ回顧展における評言など、これまで等閑視されてきた資料に基づき、従来の定説を覆してゾラの無理解の査証とされていた言動の真意を明快かつ説得的に提示した。ゾラと美術の関係に本論がもたらした大きな貢献である。

第2部「ゾラの小説と同時代の美術」は、『パリの胃袋』(73)、『居酒屋』(77)、『愛の一ページ』(78)、『ナナ』(80)、『ボヌール・デ・ダム百貨店』(83)の5作を採りあげ、これら小説と当時の美術との関係を多彩に描き出す。

とくに第6章「芸術と共和主義(2)—マネとマネによる1878年の都市風景画とゾラの小説」で論者は、1878年6月30日、第3共和政下において初めて制定された国民の祝日に三色旗で飾り立てられたパリの町を描いたマネとマネの作品の類似と相違とに注目し、それと『パリの胃袋』との関連を明らかにしたうえで、王党派のマク=マオン元帥の退場と共和派のグレヴィ政権の発足など当時の政治・社会的背景をも勘案しつつ、79年のパリ新市庁舎の装飾壁画プロジェクト(共和派としての夢)をゾラとマネが共有していたこと、その夢がマネの絵に描かれた「松葉杖の男」だけでなく、小説『制作』にも読みとれること、また作中人物フロランの政治的破綻を画家クロードが美学的に引き継ぐことなどを指摘した。論者の卓抜な着想によって初めて明らかにされた本論の創見である。

さらに第7章から第9章においてゾラの傑作『居酒屋』(77)と『ナナ』(80)を採りあげ、これらと絵画との関連をジェンダーやセクシュアリティの視点から分析した箇所も、論者の優れた感受性と構想力を遺憾なく発揮した議論となっている。とくにゾラの小説本文とマネの図像とを綿密に比較照合して、マネの絵画《ナナ》(77)のなかに小説『居酒屋』第11章のさまざまな描写が総合的に取り込まれていることを立証し、両者の相同関係がゾラの本文に暗示されていた性的ほのめかしにまで及んでいる

ことを指摘した点も、文学と美術の関係を解明する者に大きな示唆を与えてくれる。第10章において『ボヌール・デ・ダム百貨店』(83)を素材にして、小説に近代商業の表象として描かれた「ショーウィンドウ」が、同時代のマネの《フォリ・ベルジェールの酒場》をはじめ、ティソやドガの売り子の画にも見られることを指摘し、そこに女性の身体の断片化と鏡による増殖のイメージを読みとった読解も、論者の優れた着想をしめす一例である。

第3部「ゾラとマネ：共和主義者の共闘」は、ゾラとマネの共闘関係が70年代以降もつづいていたことを、これまでほとんど注目されなかったマネからゾラへの書簡資料に基づき論証した。とりわけ79年の共和派政権の誕生と新しいパリ市庁舎の装飾というプロジェクトにより、一般に両者の関係に齟齬が生じたとされるときに、マネはむしろゾラとその「自然主義」の陣営に接近していることを明らかにした点は、本論の大きな収穫と言うべきであろう。

当時の文学と美術の双方に関する徹底した資料調査、明快な論証による定説の批判、感性と論理を兼ね備えた卓抜な解釈など、きわめて説得的で完成度の高い論文であるが、さらに考慮されるべき点もないわけではない。ゾラのマネや印象派への「苦言」とされているものの裏にあるゾラの真意を当時のさまざまな状況から擁護した諸点はそれぞれに是認できるが、ゾラを批判した従来の定説はゾラには予想できなかったその後の印象派の展開をも踏まえている点なども考慮されて然るべきかもしれない。第3部が、第1部や第2部に比べるとやや迫力を欠いたのも残念である。しかしこれらは容易に補足できる課題であり、本論文の価値をなんら損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2012年2月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。